

河野貴美子著『日本靈異記と中国の伝承』

出雲路 修

「日本靈異記と中国の伝承」に関心を持った研究者は、みな同じ道をたどるように思える。すなわち、『日本靈異記』との関わりで中国説話を読むならば、たとえば『古小説鈎沈』や『法苑珠林』『太平広記』『夷堅志』といった簡便な書物を通読するだけで、実に多くの類似伝承を見出すことができる。最初のうちはうれしいのだが、やがてどうすればいいのか途方に暮れるほどの量になる。類似伝承はある程度はその研究者自身の論理で整理できるのだが、整理できない多くのものが残ってしまう。未整理の類似伝承を多く抱え込んで、みな四苦八苦する。…という次第。

私自身のことをいうならば、卒業論文は「『日本国現報善悪靈異記』その伝承の原型について」。それを解体して、「よみがへり」考、「物語史の黎明」、落ち穂を拾って「説話の変容」、を書いた。しかし、卒論を書くために調べて知ったことの多くは、未整理のままに長年放置した。整理する論理や体系が、構築できなかったのである。(最近になってその一部を未整理のままに、ええいッ、と放り出して「冥界の金宮について」を書き、新大系の脚注を書いたのだが…)。

いま、どの研究者も、未整理の類似伝承を多く抱え込んで、静

かに格闘をつづけている。某誌に掲載された本書の書評の「膨大な新資料の羅列」とある「新」の一字の評価に困惑する研究者は少なくはないだろう。

本書一冊、挙げて『靈異記』上巻第三縁が解析され、さまざまなおモチーフが中国の伝承と関係づけられる。

個別の事例(じつは、これこそが本書の生命なのだが)の当否についての私見はここでは述べずに、全体的な基本的な問題についての感想を列挙する。

その1 本書の論述が、これでもかこれでもか、と次から次へと例を繰り出すかたちをとり、本書を結果的に浩瀚なものにしてしまったのには理由がある。決め手となる類似伝承が無い、ということである。たとえば、「雷イコール小子」の例、「強力な小子」あるいは「小子による天地創造」、「石投げによる力比べ」「足のはやい雷の子」といった例が中国説話に見えない(いずれも本書の著者の判断)。しかも、「無い」ということを、本書の著者は出発点としない。「あるはずだ」という信念(?)にしがたがって、枠をどんどん拡大して中国説話の世界を探索する。これをよしとする立場もあろうが、私にはなじめない。

その2 枠の拡大には、雷イコール龍蛇、という公式が最大限に適用されている。雷イコール龍蛇、という万能公式なしでは本書はおそらくは成り立たない。しかし、『靈異記』の「雷」は龍蛇とは別の系統の伝承であろうという予感をもっている私は、雷イコール龍蛇、という万能公式を中心に据えての論述には大きな

疑問をもつ。

その3 さまざまな関係伝承が列挙されるのだが、上巻三縁全体にわたって均等な密度で論ずることに配慮するあまり、すべてが浅く論じられてしまっている。しかも著者自身の考えが明確に示されないばかりが少なくない。関係伝承の列挙が最終目的のような印象さえあり、これでは、研究書ではなく基礎資料を集成した「便利な」書物として受けとめられてゆく虞がある（わかりきつたことを言うならば、用例の豊富さを賞賛する読者は本書にとつて良い読者とはいえない）。「杖」（二六ページ）「竹」（五九ページ）などはもっと踏み込んで論じられなければ意味がない。特に、長谷寺の方八尺の石（二六二ページ）、道場寺（二二二ページ）、恵恪の説話（二四三ページ）など、きわめて貴重な指摘が、この程度の扱いで放置されるのは残念という他はない。これらは『靈異記』研究の画期ともなるかも知れない可能性を秘めている重要な指摘のように私には思える。ところが、著者自身がそうは思っていないふうなのが、本書では最大の問題である。統論に期待したい。

その4 本書で指摘される上巻三縁と諸伝承との類似の度合い、あるいは関係のレベルが、じつにさまざまである。本書のような方法ではやむをえないとも言えるが、書承・口承を想定してのばあいと、山口敦史によるすぐれた書評にもすでに指摘されていたグルジアの例（二五五ページ）のように、そのような想定ができないばあいと、は、最低限峻別して論ずるべきであろう。

その5 研究者の諸説一覧のごとき趣で記述がなされるが、著

者自身の考えが示されないばあいが少なくない。たとえば私がその議論にかかわった例でいうならば、「日本国現報善惡靈異記」という題号の問題（三三五ページ以下、および三三八ページ註1）。

その6 上巻三縁の分断された小部分の、類似例を求めて中国説話が探索される。あまりに細分されたため、周到であるという印象を与えているのだが、たとえば「鐘堂」への関心が薄いなど、重大な遺漏もある。論じ残されたことの中の最大の問題は、なぜ「元興寺」なのか、なぜ「尾張国阿育郡片菟里」なのか、ということであろう。この「なぜ」が解明されることによつてはじめて、中国説話のモチーフの日本への移入、が明らかにされるはずである。中国の伝承との関係を専らに考察する本書では、これらは関心の外にあるのだが、後に「元興寺」について考察されている箇所（三八六ページ）ではやはり言及すべきであろう。その言及がないため、元興寺も、そして「雷」も、もうひとつ不明瞭なままに放置された、という印象を受ける。

その7 著者は「仏教」をたいそう特別なものとして考えているようである。それはそれで正しい判断なのだが、仏教と非仏教とを峻別して2項対立にもちこんで議論がなされるとき、著者は仏教をきわめて狭いものに限定してしまふきらいがある。たとえば仏教説話と世俗説話との認定の問題。中巻二三縁・中巻三三縁・上巻二六縁・上巻二八縁などを仏教説話らしからぬものとするのは、著者のあまりに狭い仏教説話観が問われるべきであろう。

その8 仏教と非仏教とを峻別して論ずる著者は、たとえば志怪と仏教説話集とを截然と区別して論述する。この区別は、お

そらくは無理があろう。『宣驗記』『冥祥記』など仏教説話集の志怪の位置付けが問題となろう。本書が仏教説話集を切り捨てたような印象を与える方法を採用、その根柢にはこの区別が存するのだが、「志怪小説的な奇異譚」（三七九ページ）は仏教説話集に満ち溢れているのであり、書物のジャンルによって所収説話のモチーフが決まるわけではないのだから、このような区別がさほど有効とも思えない。

その9 伝承経路について、文化的な共通基盤の想定や口承の想定もなされているようなのだが、本書はやはり書物による伝承をまず想定している。「志怪書の移入」ということは、中国の伝承世界そのものの移入を意味するものといえよう。つまり、中国の伝承世界がもつ興味、発想、モチーフの移入である。（三八四ページ）とされる。しかし、本書における、書物としての志怪への期待の大きさは、やはり問題があろう。直接の原拠に擬することができるとの類似伝承が現存の志怪を中心とした書物の世界に見できないことは厳然たる事実である。「志怪小説的な奇異譚に、仏教説話としてのペール（話末評語において仏教的な立場から説話を評すること。また、登場人物や説話の舞台を仏教に関わらせて設定することなど）をかぶせた説話」（三七九ページ）という把握がかりに正しいとしても、「志怪小説的な奇異譚」を書物としての志怪からの影響で成った、とするのは、はたしてどうか。「志怪小説的な奇異譚」という著者自身の用語に眩惑されてはいないか。

その10 本書所引の本文について、所拠のテキストが明示され

ているのだからそれでいいとはいえるのだろうか、たとえば八九ページに引用された『酉陽雜俎』の文のように、訓読文と原文（九四ページ注9）との句読が異なるのはやはり問題であらうし、『畫異記』本文の引用も、所拠のテキストが相違するため訓読文と原文とが異なるのは、目障りではないだろうか。

その11 最後に、本書に対してのきわめて基本的な疑問を、ここに記す。いったい本書はどのような読者を想定しているのだろうか。私のような無精者にはなるほど便利なのだが、多くの研究者が座右に置いている『太平広記』の關係本文が全文掲出されているのは、奇異な印象を受ける。本書は研究書ではなくで、便利なガイドブックではないはず。『太平広記』の本文が全文掲出されていないことを嫌うような人にまで読んでもらう必要は無かるう。

以上、私の関心に沿って本書のごく一部分をとりあげて感想を述べた。話題が多岐にわたるため、箇条書きにしたのであって、形式それ自体の失礼をおゆるしいただきたい。散漫な読みに基づいた蕪雑な言辞を、ご海容ねがいたい。

本書は、あまりにも早い未整理の段階で書物にされてしまったという感じは否定できないのだが、大きな原石のような印象を、私は受けた。前述した「方八尺の石」「道場寺」など驚嘆すべき大発見が、まだ磨きをかけられずにある。磨かれて、どのような光を放つだろうか。今後の展開に、私は大きな興味をもつ。

（一九九六・一〇 勉誠社 A5判 三九六頁 九、二七〇円）